三重大学教育学部研究紀要　第74巻　第2号　教育実践（2023）315－323頁

国際交流における実践と課題

－日本語教育の多面性に焦点を当てて－

服部　明子*・佐藤　圭司**

Practices and Issues of International Exchange:
Focusing on the multifacetedness of Japanese language education

Akiko Hattori* and Keiji Sato**

要　　旨

本稿は、日本と台湾でオンラインを通して行った日本語教育と国際交流の実践について報告するものである。本取組みは、日本と台湾で日本語教育を専門とする大学教員が連携し、日本人学部および大学院生、中等教育段階で日本語を学ぶ学習者を対象として、日本語および日本語教育への理解を深めることを目的に計画・実施した。本取組みを通し、異文化理解能力や日本語能力を深めるためには、授業目的に即した双方向性の活動が学習の初期から段階的に行えるような、カリキュラムおよび授業デザインが重要であることが示された。

キーワード：オンライン授業、台湾、日本語学習者、日本語教育人材

1. はじめに

本稿では、日本と台湾において行った日本語教育と国際交流の実践について報告する。実践の目的は、日本と台湾で日本語教育を専門とする大学教員が連携し、日本人学部および大学院生、中等教育段階で日本語を学ぶ学習者を対象に、日本語および日本語教育への理解を深めることである。

本実践の背景には、2020年のCOVID-19発生以降の長期に渡る教育への影響がある。国際移動が制限され、国と国とを跨いだ学生交流や直接現地に渡航し、異文化理解を深める教育が困難になったことから、世界とつながる機会や接点を確保し、国際交流を実践する教育として、ICT（Information and Communication Technology）の活用が急速に進んだ。ICTを用いた実践は以前から行われてきた。近年、主に高等教育機関などにおいてグローバル人材の育成を目的とした、いわゆる「国際共修」では、オンラインにより遠隔で国際教育や交流を実践する枠組みとして、COIL（Collaborative Online International Learning）、VE（Virtual Exchange）、OIE（Online International Exchange）、VM（Virtual Mobility）や BL（Blended Learning）などが示されてきた。国際共修とは、末松・秋庭・米澤（2019）では、「言語や文化の異なる学習者同士が、意味ある交流（Meaningful Interaction）を通して、他者への理解を深めながら、己を見つめなおすメタ認知活動を経て、新しい価値観を創造する学習体験」と定義されている。コロナ禍では、こうしたオンライン国際共修が一気に進み、実践が蓄積されたことで、新たな知見が示された。村田（2022）

＊三重大学教育学部
＊＊台湾文藻外語大学

は、自国でも相手国でもない中間の場での協働は、多様な人々をつなぐことができ、学生へのソーシャルサポートという点において重要な意義があると指摘している。

国際共修の分野だけでなく、日本語教育界でもオンライン授業を取り入れる動きが加速した。各教育機関ではよりよいオンライン授業を目指すための取組みが行われ、報告されている。河内・村田・長谷川・竹山・池田（2021）は、Zoom と LMS を組み合わせたオンライン授業の実施状況を報告し、メリットと課題を分析している。教員側のメリットとして「学習成果が迅速に把握・共有可能」、「紙媒体が不要、コピーの手間がない」などを挙げ、デメリットとしては「文字指導が困難、文法導入が困難」、「不安定な通信環境、デバイスの問題」などを挙げて、具体的に分析している。藤本（2019）は COVID-19 拡大前の論考だが、日本語初級レベルのオンライングループ授業を担当した教師へのインタビューを行い、その結果を分析している。その中で、多くの教師がやりづらさを感じたことを挙げ、「初級レベルの外国語授業の場合、教師、学習者とも言葉の不足を補うため、即時的にかなり非言語フィードバックに頼っているところがあり、オンラインでの授業ではそれが上手く伝わらない」などの問題点を指摘している。福良（2021）は、日本語上級レベルの学生を対象にオンライン授業についてアンケート調査を行い、「学生は同期型・非同期型それぞれに学習の意義を見出していることがわかった」と意義を強調している。山田・伊藤（2021）でも、「対面授業」「オンライン授業」という二つの学習形態が二項対立的に存在しているのではなく、教師による創意工夫で形態にとらわれない授業、学習形態を作り出すことができると述べており、「学習内容を考慮し、対面/オンラインの学習環境だからこそ最も成立する授業のデザイン」の追求が必要だと主張している。以上に示したように、現在、オンラインのメリットと学習内容や目的を踏まえることで、より有用な授業デザインにするための模索が続いている。

2. 本実践の概要とねらい

本実践の概要は、表 1 の通りである。各授業の内容については、次章で詳述する。

表 1　本実践の概要

	日本（三重大学）		台湾（文藻外語大学）	
実施日時 （日本時間）	2022 年 1 月 11 日 （13:10～14:00）	2021 年 12 月 14 日 （10:10～11：00）		2022 年 5 月 17 日 （10:10～11:00）
授業科目名 （開講学部）	「日本語教授法」 （教育学部）	「外国につながる 児童生徒への教育」 （教職大学院）	「日本語会話三」 （専科部）	「日本語会話三」 （専科部）
授業内容	台湾の日本語教育事情	三重県の紹介		
受講生	教育学部 3 名	教職大学院 1 名	日本語学科 36 名	日本語学科 12 名 英語学科 27 名
ツール	Google Meet			

本実践では、日本と台湾で日本語教育を行う大学教員が連携し、異なる対象者、異なる目的の授業を有機的に結びつけることで、各授業のねらいを達成しようと試みた。

台湾（文藻外語大学）における実践は、日本語学習者を対象とし、日本への理解を深め、日本語運用能力を高めるために行った。日本語学習者への日本語教育については、前章でも挙げたように、コロナ

禍により、国際交流および日本語教育の実践の多くの現場は、急激にオンラインへと変化し、即時的なフィードバックや運用のための口頭練習などが容易ではなくなった。こうした教育上の課題が生じたことから、国際交流を通じての現状を知り、日本語の理解を深めるとともに日本語学習への動機付けを促すことを目的とした授業を計画することにした。COVID-19 拡大を受け、台湾でもコロナ禍となり、状況に応じ、様々な対応を取ってきた。文藻外語大学においては、まだ感染者が少数であった 2020 年 2 月、当該年度の二学期が始まるタイミングで 2 週間のオンライン授業を行うこととなった。それまでは主に講義の補助的ツールとして使用していた「クラウド E ラーニングシステム」を利用し、オンデマンド型のオンライン授業を全学で行った。初めての試みであったため、教師からオンライン授業実施のための講座が必要であるとの声が上がり、それに応え大学内の「教師発展センター」が主導し Zoom を活用した講義の方法などの講座が数回開かれた。その後、台湾全体では、マスクを政府が管理し、健康保険カードを持参し全国の薬局で定期的に入手できるようにしたり、スマートフォンの QR コード読み取り機能を利用し、全国民の行動履歴通知システムが行われる（各施設や公共交通機関利用時にショートメッセージを送信する）など、徹底した感染対策が取られ、感染者が出ることはなかった。しかし、一年ほど経過した 2021 年 5 月に感染が広がりレベル 2 の警戒措置が取られると同時に、全国の教育機関でのオンライン授業実施となった。文藻外語大学では 5 月から 6 月にかけ 8 週間オンライン授業を行ったが、この学期の期末試験もオンラインで行うことになり、その実施方法などは教師に委ねられたため、教師は模索しながら対応した。夏休み後も新規感染者数は減少していなかったため、休み明けの新年度は新しい試みとして、ハイブリッド型のオンライン授業を取り入れた。対面授業を望む学生も多いことから、学生の半数が登校し教室で対面授業を受け、残りの半数は自宅で端末を通してオンライン授業を受けるというやり方である。これを 2 週ほど行った頃に感染拡大が収まってきたことを受け、全学対面授業に切り替わった。ハイブリッド型のオンライン授業に関しては賛否両論が出たが、教師の経験値が上がったことは確かである。2022 年には台湾でもオミクロン株が感染拡大し、前年度と同様の措置を取ることになった。この間、大学側が推奨するツールは「Zoom」から始まり、「Google Meet」、「Microsoft Teams」へと変遷した。

一方、日本（三重大学）では、教育学部および教職大学の学生を対象とした日本語教育に関する授業科目の中で本実践を行うことにした。三重県内に在籍する日本語指導が必要な外国人児童生徒等は全国でも高い比率にあり、全国的にもこうした児童生徒が増加していることから、教育学部および教職大学院には、日本語教育に関する科目が設けられている。日本語教育に関する授業として、教職大学院に設けられているのは 1 科目の選択授業である。また、教育学部の国語教育コースには 17 科目が設けられているが、1 科目を除いて選択科目であり、教員養成科目には当たらない。

日本語教育においては，グローバル化といった社会的変化に伴い、学習者の背景や学習目的、学習する場などが多様化している。そのため教育実践においても、「多様性」「多面性」が欠かせない視点だと考える。「多様性」「多面性」といった語は類似的な意味合いで用いられる場合もあれば、イデオロギーとの関連から論じられる場合もある。久保田（2016）は、日本語教育における「多様性」を「人間および人間に関する問題」、「多面性」を「社会・歴史・経済の問題」としてそれぞれを捉えている。後者については、社会的・文化的・政治的・歴史的・経済的な要素とイデオロギーにより成り立っているとし、日本語教師は、規範的言語を教授するだけではなく、多様性と多面性の両面をクリティカルに考えることで、単純化・画一化された教育観念から脱却し、日本語教育のもつ複雑性と流動性に意識が向けられると述べ、ことばを使った意味の共有に留まらない「越境コミュニケーション」の必要性を主張している。また、細川他（2016）は、ことばの教育に関する理論と実践から、その目的が「市民性形成」にあるとし、「日本文化を発信するための道具としての日本語教育ではなく、多様なアイデンティティを承認

する複数性の社会という政治的・社会的選択の中で、新しい公共的な文化の可能性を探る担い手を構想することができる（p. 15）」と述べている。

平成 30（2018）年 3 月には、文化庁より日本語教育人材についての報告書が出された。報告書では、在留外国人の増加、在留目的の多様化など、日本語教育を取り巻く状況が大きく変化したことを受け、平成 12 年に示された日本語教師の養成に関する教育内容を新たに検討する必要が生じたことが示された。また、日本語教育人材に共通して求められる重要な基本的な資質・能力として「(1) 日本語を正確に理解し的確に運用できる能力を持っていること。(2) 多様な言語・文化・社会的背景を持つ学習者と接する上で，文化多様性を理解し尊重する態度を持っていること。(3) コミュニケーションを通じてコミュニケーションを学ぶという日本語教育の特性を理解していること。(p.22)」の 3 点が挙げられ、分野を問わず、必須の要件であることが示された。現在、日本語教育は、本報告書で挙げられた、日本語人材の「活動分野」としての 7 分野（生活者、留学生、児童生徒等、就労者、難民等、海外）とそれぞれの課題に即した施策が展開されている。令和元年 6 月 28 日には、「日本語教育の推進に関する法律（令和元年法律第 48 号）」が公布、施行された。今後、日本語教育のさらなる推進が予測される。

また、文部科学省においては、児童生徒への日本語指導の施策が行われており、隔年で「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」が実施されている。令和 3 年度の最新報告「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（令和 3 年度）」によると、この 10 年間で日本語指導が必要な児童生徒数は増え続けており、日本語指導が必要な児童生徒数は 58,307 人（外国籍の児童生徒数：47,619 人、日本国籍の児童生徒数：10,688 人）となり、令和 2 年度の前回調査よりも 7,181 人増加したことが報告されている（2022 年 11 月 30 日現在）。以上を踏まえ、授業では主に日本語教育の現状を踏まえた基本的な内容を取り上げ、外国人の受け入れに関する最新の社会的動向、外国人児童生徒等の実態を踏まえて日本語指導や教科指導の方法を検討・習得するために、各受講生が自ら学びを深める契機となるように、教員が人と人との交流を直接体験する場の創設とその仕組み作りを進めてきた。

以上の各大学の事情を踏まえ、本実践は日本と台湾を遠隔でつなぎ「日本語教育」という共通項を通して、海外で学ぶ日本語学習者、日本語教育人材を目指して学ぶ日本人学生を対象とし、多面的に学びと実践を拡張するための試みとして位置づけることにした。

3. 各授業における実践および学生の感想

3.1 「日本語教授法」「外国につながる児童生徒への教育」について

前述の通り、三重大学教育学部および教職大学院では以下の授業内で実践を行った。

① 授業科目名「外国につながる児童生徒への教育」
（2021 年 12 月 14 日（火）10：10ー11：00（日本時間））
受講者：教職大学院日本人学生 1 名

② 授業科目名：「日本語教授法（教育学部）」（2022 年 1 月 11 日（火）13：10～14：00（日本時間））
受講者：教育学部日本人学生 3 名（2 年生 2 名，3 年生 1 名）

①については、教職大学院生 1 名が文藻外語大学専科部日本語学科（中等教育段階学習者）の 3 年生で「日本語会話三」を受講している台湾人学習者に対し、「三重県および三重大学について」紹介を行った。日本語を教える際には、学習者の日本語習熟度に合わせて、学習者がよりよく理解できるよう、教師は発話をコントロールすることが求められる。そこで、語彙・表現に配慮しながらスライドを用いて

日本事情を分かりやすく伝える体験をしてもらうことにした。教職大学院生は日本語教育への知識や、日本語学習者と接した経験も十分ではなかったため、紹介時間は 15 分とし、残りの 45 分は教員が担当した。取り上げる項目は、事前に台湾側の教員から日本語学科の学生に聞きたいことを尋ねてもらい、「おすすめの食べ物」「有名な観光地」「お土産」「三重県はどんなところか」「伊勢神宮」についての 5 点とした。①の活動後、教職大学院生からは、国際交流の楽しさと異文化および自国への理解が深まったという声が聞かれた。その一方で、最終レポートでは、本実践を通して得られた学びについては言及されていなかった。その理由として、初めての試みであったことから、インターネットや使用機器の操作など、環境上の不具合によって、双方向のやりとりが困難であったことが推測される。相互のやりとりが行われず一方的に紹介する活動だけでは、自らが学びを得られるまでには至らないということが示唆されたと考えられる。

②については、教育学部生 3 名を対象に「日本語教授法」の講義の一環として行った。台湾側の教員にオンラインでゲストスピーカーとして加わってもらい、台湾の教育事情、現地での日本語教育事情、海外における日本人学校について講義をしてもらった。図 1 は授業で使用したスライドの一部である。当日は、開始から 10 分をイントロダクション、続く 50 分を台湾で働く日本語教師ゲストの話、残りの 30 分をリフレクションの時間とした。学部学生の授業であったため、まずは海外と日本語教育への視野を広げることが目的であったが、授業時と授業後には通常の講義時より活発に質問が出され、海外で日本語を教える日本語教師から現地をオンラインでつないで直接話を聞くことで日本語教育や異文化への理解を深めようとする積極的な姿が見られた。

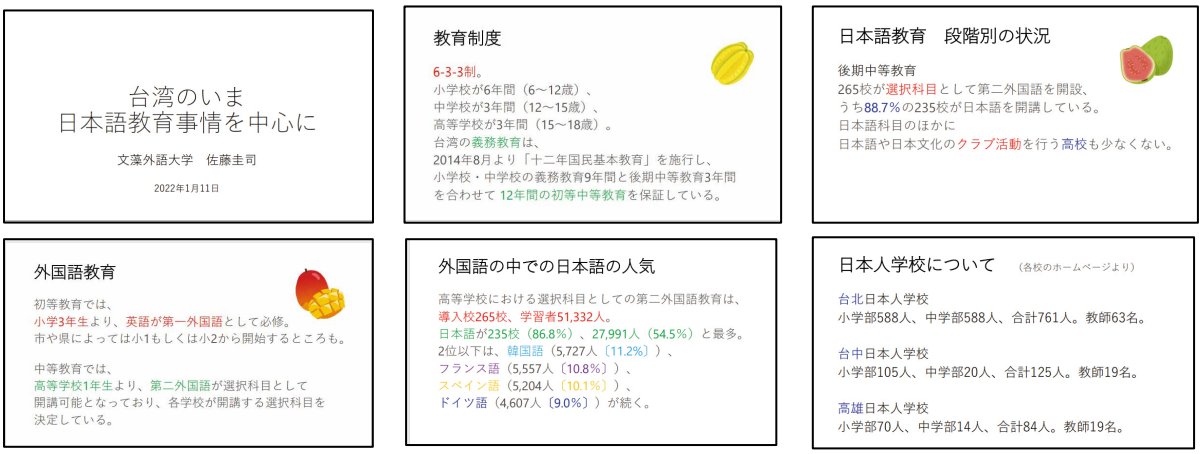

図 1　「日本語教授法」スライド

3.2　「日本語会話三」について

国際交流を通じて日本語への理解を深め、日本語習得を促すことを目的とし、以下の通り、文藻外語大学の次の授業内で実践を行った。

① 授業科目名「日本語会話三」（2021 年 12 月 14 日（火）09：10―10：00（台湾時間））
　授業内容：三重大学教職大学院生による紹介「三重県・三重大学について」
　受講生：文藻外語大学専科部日本語学科三年 36 名

② 授業科目：「日本語会話三」（2022 年 5 月 17 日（火）09：10―10：00（台湾時間）
　授業内容：日本側の教員による「三重県・三重大学について」
　受講者：文藻外語大学専科部日本語学科三年 12 名、英語学科三年 27 名

受講生について、「専科部」とは日本の高専に相当する五年制の課程であり、三年生は 17-18 歳となる。英語学科 27 名は第二外国語として日本語を選択した生徒である。両科目とも 1、2 年時に学習した日本語の基礎をもとに、運用能力として、日本語コミュニケーション能力を向上させることを第一の目標に掲げており、それに加え日本文化の理解も目指す科目である。おおよそ JLPT の N3 程度に当たる授業として位置づけている。

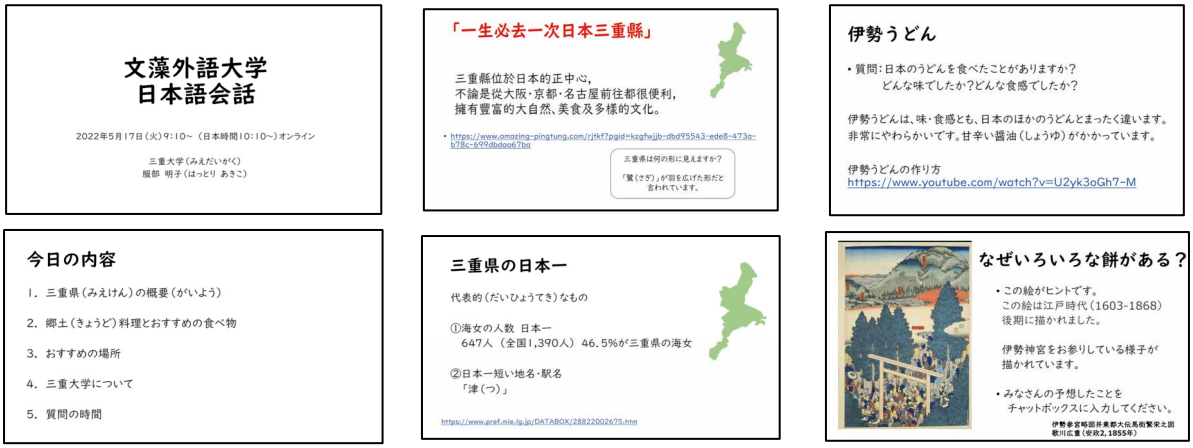

図 2　「日本語会話」スライド

3.2.1　学生の感想「三重県・三重大学について（2021 年 12 月 14 日）」

リモートで話を聴いて、翌週の授業で以下のように感想を日本語で書くよう指示し、31 名が提出した。

「三重県や三重大学の話を聞いて、思ったことや感じたことを書いてください。今まで知らなかったけど今回分かったことや、面白い・興味深いと思ったこと、ぜひ試してみたいと思ったことなど、感想を書いてください。」回答を見ると、以下のような率直な感想があった。

・日本人とオンラインミーティング初めてだったので、面白かったです。
・初めて三重県のことを聞いたので、びっくりしました。
・神宮や神社などに興味を持ちました。
・いろいろ三重県のことを知りました。
・三重県は日本のどこにあるかわかった。

まず、ねらいの一つとして設定した「日本文化理解」に関しては、学生一人一人がそれぞれの日本文化に興味を持って話を聴けたと思われる。

次に、三重県の文化遺産や自然景勝地、観光スポットなどに関して、「伊勢神宮」を挙げた学生が 8 名いた。「伊勢神宮の歴史をもっと知りたいです。」という感想も見られ、深く興味を持ったことがうかがえる。その他、「赤目十八滝」を挙げた学生が 2 名、「熊野古道」、「青い洞窟」、「夫婦岩」、「鬼ヶ城」、「鳥羽水族館」、「伊勢スカイライン」を挙げた学生がそれぞれ 1 名ずついた。

また、「お祭り・花火大会」を挙げた学生が 4 名いた。「屋台や浴衣などは面白いと思います。」という感想も見られ、日本のマンガやアニメで見た情景をイメージする学生も多かったかもしれない。

ゲストスピーカーは、多くの写真を見せながら紹介してくれ、より興味深く聴けていたようだ。中でも食べ物の写真が映されるたびに、「わーっ」という声が上がった。感想の中には食べ物を挙げる学生も

多く、「赤福氷」は 10 名、「チーズケーキ」は 2 名、「伊勢うどん」は 1 名の学生が挙げていた。

最後に、学生によって書かれた感想を見て特筆すべきことは、「〇〇たい」という文末表現が多かったことである。「行きたい・行ってみたい」が 20、「食べたい・食べてみたい」が 11、「見たい・見に行きたい」が 3 つ、「旅行したい」が 1 つ、「知りたい」が 1 つである。学生たちの気持ちが素直に表れた表現であると考えられる。

3.2.2　学生の感想「三重県・三重大学について（2022 年 5 月 17 日）」

リモートで話を聴き、授業後に以下について書くよう指示し、36 名が提出した。

「1.　学んだこと、わかったことは何ですか？」

「2.　もっと知りたいと思ったことは何ですか？」

表 2　学んだこと、わかったこと（名）

三重県の地理的位置や地形	12
三重県の郷土料理・特産品	12
三重県の産業	4
有名な所・観光地	3
海女について	3
伊勢神宮	2
三重大学について	2
忍者について	1

表 3　もっと知りたいと思ったこと（名）

忍者のこと	12
観光スポット・景勝地	6
三重県の歴史・文化	5
海女について	5
三重大学について	3
おいしい食べ物	1
三重県の方言	1
漁業について	1
鉄道について	1

【その他の回答】

・「三重県の形は鳥みたいです」

・「伊勢うどんは日本のほかのうどんと違います。」

・「伊勢うどんには甘辛い醤油がかかっています。」

・「海女という職業は初めて聞きました。」

・「三重県は日本で海女が多いことが分かりました。」

・「日本の半分くらいの海女は三重県にいる。」

・「本当に忍者がいます。最初はただ冗談だと思った。」

最も多かった回答である「忍者のこと」については、「忍者体験」、「忍者の一日の紹介」、「忍者についての物語」などの言葉が見られた。

また、「海女という人が何で存在していますか。」という率直な質問を投げかけた学生もいた。

「三重大学留学について」が 3 名で、「三重大学と留学について詳しく知りたいです。」という声も上がった。ねらいの一つとして設定した「日本文化理解」に関しては、話を聴き三重県の様々な文化について理解ができたと思われる。台湾にはない忍者や海女への興味は非常に強かったようである。

4. まとめと今後の課題

本実践は学生の感想などから、日本人学部および大学院生生を対象とし、日本語教育の現状を知り、日本語教育に携わる上での理解を深めること、中等教育段階に該当する日本語学習者を対象とし、日本語への理解を深め、日本語習得を促す動機付けの一端となったことが窺え、2 章に示したねらいに即した授業となったと考えられる。またオンラインを活用したことで、図 3 のように、実践と学びが拡張したと捉えられる。

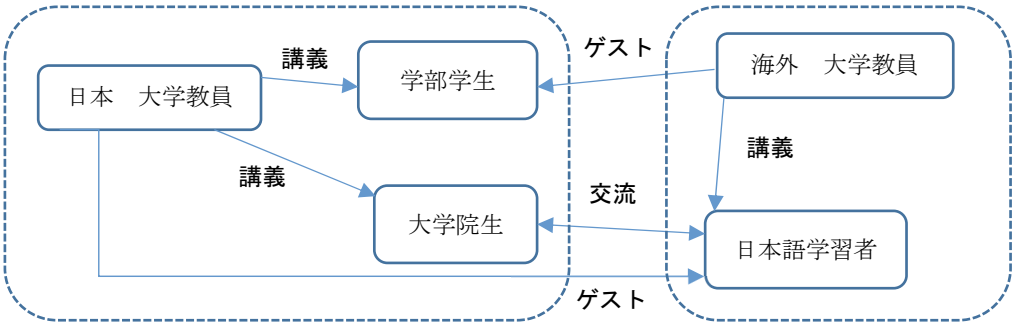

図 3　オンラインによる実践と学びの広がり

一方、日本語教育における多面性に焦点を当てるという点については課題が残っている。学生の感想を見ると、ごく初期段階の学びに留まっていると解釈されるものが多く、日本人学生は「知らなかったことを知る機会になった」ということ以上の感想は挙げられず、台湾人日本語学習者についても、日本語を習得段階にある学習者ということもあるためか、日本語で書かれた感想は表面的だと捉えられる。

しかし裏を返せば、学習のごく初期段階で「知らないことを知る」きっかけとしては有用なプログラムであったと見ることもできる。台湾の学生からの「三重大学と留学について知りたい」という声があったことにも現れているように、学習の初期段階や留学前からオンラインで国際交流を進めることで、日本をより身近に感じることができたと考えられる。また、3 章で述べた大学院生の様子からは、こうしたプログラムは、双方向性の活動としてデザインされてこそ、より有用なものになり得ることが示唆されたといえよう。

COVID-19 の影響により、留学や国際交流の機会が非常に得られにくくなったことから、オンラインによる遠隔交流の取組みは以前より実施が容易になった。本実践のような活動を段階的に導入することで、効果的に学びを深めることができる可能性があると思われることから、今後は、単なる一回性の国際交流体験とするのではなく、異文化理解能力や日本語能力を深めるための教育として段階的に発展させられるようなカリキュラムおよび授業デザインを構築することが重要だと考えられる。

参考文献

河内彩香・村田晶子・長谷川由香・竹山直子・池田幸弘（2021）「教員と学習者はオンライン授業をどうとらえたか—Zoom と Google Classroom を併用した日本語教育—」『多文化社会と言語教育』1 巻 30-45.

久保田竜子（2016）「多様性・多面性から再考する言語教育の役割」『ヨーロッパ日本語教育 21（The Proceedings of The 20th Japanese Language Symposium in Europe）報告・発表論文集』22-31.

末松和子・秋庭裕子・米澤由香子（2019）『国際共修：文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂

藤本かおる（2019）「日本語初級レベルのグループオンライン授業での教室活動に関する研究 ―担当教師へのインタビューを中心に―」『日本 e-learning 学会誌』19 巻 27-41.

福良直子（2021）「同期型・非同期型併用による上級日本語教育の実践 ： 学部留学生を対象とした「総合日本語」の授業の振り返りから」『多文化社会と留学生交流 ： 大阪大学国際教育交流センター研究論集』25 巻 47-54.

文化庁・文化審議会国語文化会（2018）「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版（平成 30 年 3 月 4 日）」https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/1401908.html（2022 年 11 月 30 日参照）

細川英雄 ・尾辻恵美・ マルチェッラ・マリオッティ編著（2016）『市民性形成とことばの教育 ―母語・第二言語・外国語を超えて』くろしお出版

村田晶子編著（2022）『オンライン国際交流と協働学習　多文化共生のために』くろしお出版

蒙韞・服部明子（2022）「オンライン国際共修におけるビジネス日本語の電子教材を用いた異文化　理解教育の試行：地方国立二大学の連携から分かったこと」第 5 回日本語・日本文化研究国際学術大会（2022 年 3 月 5 日　於バーチャル新潟大学）

文部科学省（2022）「令和 3 年度　日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（令和 4 年 10 月）」https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/09/1421569_00004.htm（2022 年 11 月 30 日参照）

山田智久・伊藤秀明編著（2021）『オンライン授業を考える　日本語教師のための ICT リテラシー』くろしお出版

Fiona Hunter (2020) Building a Stronger Future for Internationalization: From Reflection to Action,基調講演「新型コロナ禍と国際教育の将来像」, Summer Institute on International Education, Japan(SIIEJ 2020)